

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(16)

幸せに生きる力の「根」を育てる

岸井 勇雄

「二十世紀は子どももの世紀」と唱えたエレン・ケイ、「子どもを太陽系の中心に」と唱えたジョン・デューイに象徴されるスタートを切った今世紀が終わろうとしている。確かに多くの人々の努力によって「子どもの権利条約」などに代表される理念が公認されるようになった前回は顕著なもの

があるが、それを押し流してしまふほどの社会変動が津波のように押し寄せ、二十一世紀がどのような社会になるのか、子育ての環境がどのようなものになるのか、予想しがたい。

その前兆はこの四半世紀に見られ、「落ちこぼれ」に始まり校内暴力、家庭内暴力、いじめ、不

登校、凶悪犯罪や売春の低年齢化やゲーム化、さらには幼児虐待の増加など、心の痛む事態が進んでいる。しかもこれが高学歴化と平行して推移しているのである。オウム真理教のグルの側近に、いわゆる一流大学や大学院を出た知的エリートが多かった事実は、善悪是非の批判力を育てるはずの高学歴が全く無力で、逆に自他を決定的な不幸におとしられている事例であろう。

生涯学習を樹木にたとえれば、幼児教育は根を、義務教育は幹を育てることに該当する。文字通りこれを根幹として、その上に自由に枝を伸ばし葉を繁らせ、花が咲き実がかなるのである。

根は地下にあって目に見えないが、根の張り具合は植物の一生を左右する。まさに人間形成における原体験の意味と重なる。幹は根の上に立つ。知識・技能の

基礎・基本からの系統学習が中心である。保育がわかりにくいのに対して、授業はよほどすっきりしている。根と幹が互いに異なったそれぞれの役割や機能や形態の意義を認識し合うことは、真の幼小連携の第一歩であろう。

人生の各時期にはそれぞれ固有の発達課題があり、それを下から踏み固めていくことが幸せな人生に不可欠であるが、そのためにはそれぞれの時期にふさわしい生活をする必要十分条件である。



乳児は空腹やおむつの濡れを泣いて訴えるたびに、母親やそれに代わる人が裏切ることなくそれに応じ、やさしく声をかけながら授乳や交換をしてくれるという繰り返しの中で、乳児期の発達課題である人間やこの社会に対する愛情や基本的信頼感を身につける。

幼児は大人への依存を保障されながら、自分の内部に育ってきた力を必ず使おうとする。この自発的使用の原理によってさまざまな遊びに熱中し、自分で考え、自分で行動し、自分で責任をもつという自立感、がんばったり我慢したりする自律感、初めてすることはうまくいかないが、何度もするうちに上手になるという有能感などを身につける。特に自然や人に直接触れ、それらと心をかよわせて生きる工夫や楽しさこそ原体験することの意味は大きい。

個体の発生は系統発生を繰り返すという生物学

上の仮説的原則がある。胎内で、原始の海で発生した生命が人類にまで進化する過程が胎児の姿で繰り返されるのである。出生後の成長・発達がまた、人類発達の歴史を踏むことに注目しなければならぬ。人類が文化を獲得するために、最も重要な条件は直立歩行であった。前足が解放されて手になったのである。

物を掴む、振り回す、叩く、投げる、ちぎる、折る、砕く、掘る、埋める、積む、崩す、立てる、倒す、というような作業が可能になり、木や石や土や水などの素材に取り組み、それを使って獲物を捕らえ、衣服を作り、住居を整えるに至った。数の概念にしても、十進法の根拠は両手の指の数以外にはない。

こうした姿は、まさに遊びを中心とする幼児の生活をほうふつとさせるものである。私たちがしなければならないのは、幼児の人間としての原体

験、いわば原始時代の人間が野山を走り回り、物を作り、ルールを定めていったことにも通ずる、個人や集団の原体験を豊かに経験させる環境を構成していくことである。幼児たちはこうした生活の中で、十分な未開時代をゆっくりと経て、着実に文明人になっていく。将来文明に押しつぶされることなく、高度情報化社会の中を生きて文明の主体的な担い手となり、さらによりよい文明の創り手となるための基盤がこうして培われるのである。

小学校以降に学習すべき文化の総量は巨大で、いわば超高層ビルに匹敵する。だから少しでも早く一階に着手しなければと考えるのは愚かだ。底を深く掘り、時間をかけて手抜きなく基礎工事をする必要が、いままでとは比べものにならないほど重要になったのである。

前近代の教育は権力者への依存の教育だった。

近代の教育は自立の教育である。現代が求めているのは自立した個人が連帯して生きる教育である。連帯とは命のつながりを意味する。環境を離れて個体はなく、すべての生命はつながっていることが明らかになった。他者を他人事（ひとごと）と思わぬ愛だけが地球を救い人類に幸福をもたらす。

幸せに生きる力の核心部分が幼児期の原体験にあることを思い、先人たちの献身的な努力によって掲げられてきた幼児教育の灯を一層大きなものにして新世紀につなげることを、持論を繰り返して願わずにはいられないのである。

（昭和女子大学）